

自己免疫性出血症治療の「均てん化」のための実態調査と「総合的」診療指針の作成
に関する研究

分担研究課題 相談と研究的精密検査（主に F8）

研究分担者 橋口照人 国立大学法人鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・教授

研究要旨

自己免疫性出血症の疑われる症例について、コンサルトを行ない、本症の診断指針に有益であるとされるクロスミキシングテストの解釈上の問題点を検討した。肝予備能の低下した症例においては本症との鑑別において注意が必要である。

A．研究目的

自己免疫性出血症の一般臨床での検査データの解釈を凝固を専門としない医師に対して理解を深め、診断の効率を高めることを目的とした。

B．研究方法

APTTの延長した症例ならびに後天性の出血傾向を示す症例のクロスミキシングテストを含む一般臨床での凝固検査データのコンサルトを行った。

（倫理面への配慮）

自己免疫性出血症を含む後天性の出血性疾患の疑われる症例の一般臨床で得られた凝固検査データのコンサルトであり、倫理的問題は発生しない。

C．研究結果

クロスミキシングテストにおける凝固因子の欠損あるいはインヒビター、LA の存在の判定は上・下凸の波形判断では不十分である。また、肝予備能の低下した症例では、後天性に凝固因子が低下することより、自己免疫性出血症との鑑別に苦慮される可能性がある。

D．考察

クロスミキシングテストの解釈結果は診断・治療方針に影響することから、上・下凸による解釈ではなく、本質的な解釈を一般臨床医に周知すべきである。また、実臨床においては、肝予備能の低下による凝固因子の低下から出血傾向をきたす症例が多く存在しており、自己免疫性出血症との鑑別を要する場合がある。

E．結論

一般臨床医に対して、自己免疫性出血症の存在と凝固検査データの解釈について更に周知する活動を継続する必要がある。

G．研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし
(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H．知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし